

市史編さんだより



(9)

二つの統計にみる

東村山市の戦後

東村山市史の現代部門を担当して、目下資料の収集や整理を行っています。「現代」とは、第二次大戦敗戦後、つまり1945年8月から今日に至るまでの期間をいふことができませんが、この間、早くも50年近く過ぎようとしています。つまり約半世紀です。前回の市史では、この時期の時間はまだ僅かなものでありましたが、歴史ともいえなかったかも知れませんが、半世紀の経過は、そこに生じた種々の

出来事と重なって歴史を形成しつつあるといえましよう。

こんなことを考えながらいくつかの統計を見ていくうち、次のような数字にぶつかりました。

一つは国勢調査の「居住地による従業(通学)地」に関する統計です。1955年(昭和30年)は、ようやく敗戦後の諸改革の激動もおさまり、経済困難をかかえながら一種の落ち着きを加えはじめた頃ですが、この統計によると、東村山市内に居住して職業活動を営んでいるものは8千400人のほりですが、このうち

市内で就業していたものは4千80人で、51・9%を占めています。つまり、有業者の半数以上が市内で働く場所を有していたのです。その重要な部分を構成していたのは農・商などの自営業者であったであります。

ところが1960年(昭和35年)になりますと市外に通勤・通学する人が6割を越えるようになります。また、この年の国勢調査は、従業者・通学者を一括して集計しているため、就業者だけの比較をすることは困難ですが、しかし、昭和30年から昭和35年の間に、東村山市が近郊農村都市的性格から、近郊住宅都市的性格へと性格を変えつつあることが、うかがわれます。

1965年(昭和40年)調査では、就業者・通学者を区別して集計していますが、自市内居住者で自市内就業者の割合は僅か31%にすぎなくなりました。

もう一つの統計は、1960年(昭和35年)調査の住民の入居時期区分の数字です。これによれば「出生時から」住んでいるものは僅か14・8%にすぎなくなりました。統計に示されるこれらの数字が東村山市という自治体の範囲における地域社会生活のどのような問題と結びつくのか、どのような問題が提起され、またどのように解決されていくのか、子細に考えてみたいと思っております。

現代担当 安原 茂